

ストラと指揮者の結婚式のような、皆が幸せなオーラを発していた夕べだった。

J.S.バッハ「管弦楽組曲第4番」ニ長調では、いつになく硬い動きのシュルトだったが、オーケストラが対話しているような「ブーレ」からは、地に足がついて、彼独特の落ち着いたフレーズングが光った。

2曲目はクララ・イエノックに委嘱した作品の世界初演で、バネ付きのおもちゃや、水の入ったワイングラスなど、身の回りの物を使うため準備に時間がかかり、やっと発された音が“キー”っという音だったので、客席からはため息がもれた。

休憩後は、ベートーヴェン「交響曲第3番《英雄》」で、「定番」に戻ったが、細部まで丁寧に、集中力を維持して演奏し終えた後は、やっと聴衆も歓迎の拍手を送った。

もともと粒の揃った、そして室内管弦楽団の割にスケールの大きな演奏をするこのオーケストラが、これから3年間のシュルトとの蜜月に大きな発展を遂げそうなスタートだった。 (中 東生)



ミュンヘン室内管の新シェフに就任したシュルト
© Florian Gansimeier

Concert ミュンヘン室内管がシュルトの首席指揮者就任コンサート

2011年、びわ湖ホールで初来日し、その純粹な音楽作りへの姿勢と心から音楽に浸る幸せを体現する姿が、共演者をはじめ関係者や聴衆にも印象的だったクレメンス・シュルトがミュンヘン室内管弦楽団の首席指揮者に就任した。2年前に初共演した同楽団は、その後1回のみ共演で首席指揮者契約を決めたという通り、10月13日の初定期演奏会は、まさしくオーケ